

はりつけに懸候へ。札に右の意趣書候てさらし候へと被仰出候。御威光にても、神をも何とも不被思召様に罷成候ては、誓紙もむなしき事に成申候。伊豆の三嶋宮根は、殊に關東の鎮守に候處、かやうの儀御聞被成輕き儀と迄にては、透と誓言等のしまりなき事に成候。台徳院様、結構成上様と迄皆心得候て居候へども、か様の所はつきりと仕たる儀に候。

一、台徳公醉狂の者御處置

又或時御城御番所宿番に罷出候者、酒に酔候て刀を抜御堀のこまよせを切申候。其段御耳に立候て早速切腹被仰付候。其時被仰出候は、酒に酔候ては、人やらこまよせやらわけも不存候。定て人と存候て切申にて可有之候。爰を御咎被遊事は無之候。御城の宿番に罷出候ものが、夫程にたわいもなく酔候て、何の用に立可申候哉。此不覺悟を其分に被成置候ては、御番も何の詮も無之由被仰候。定て御慈悲の上様に候間、御心には不便にも可被思召候へ共、かやうの所御免被成候ては、士たる者肝要の覺悟ぬけ申候故、急度被仰出たる物と相見え候。

一、駿河様御立被成度思召の虚説
世上にて台徳院様、駿河様を御立被成度被思召との沙汰、大成虚説に御座候。是は己れ／＼は御奉公と申立候て、威勢を付たがり候て、其時分の女中・僧などの申出候事無紛事に候。色々結構しこしらへ候て、駿河様へ御腹めし候様にいたし成申候。或時駿河様、西丸の御堀にて鐵炮にてかをも被遊、大御臺様へ献上被遊候。それを料理被仰付候て台徳院様にも御上被成候。是は國が初て鐵炮にて打申獻し申由被仰候へば、其まゝ其鳥をおあがり不被成、御立被遊候て、駿河様御もりの衆誰と哉らんを御呼被成、西丸は權現様御繩張にて、御世を手前へ御譲の後は、是に被成御座候。只今竹千代を指置候て國松などが、竹千代居住の城へ向ひ鐵炮を打申事、不心得成儀、とかう不被申候。是も皆付て罷在候者ども惡敷故に候とて、事の外御叱被成候。是にて知れたる事に候。最初より太子を易らるゝ思召は無之事に候。

一、神君、太閤に御逢の事

太閤の時、權現様駿河より、始て太閤へ御逢に御越被成候

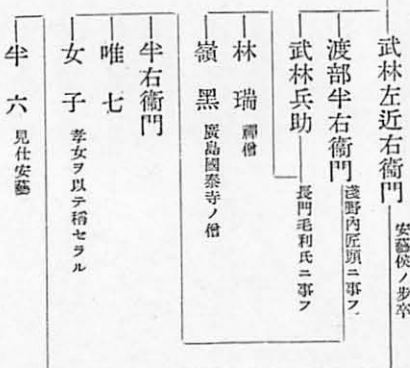
時、榊原十左衛門被申候は、是は危儀に候。其まゝ是に被成御座候て可然候。長久手の時、上方勢の手並能存候。是に被成御座候て、上方勢御引請被成候ても、是より東の方へは、手もさゝせ間敷候間、此度の御上洛御無用に可被成候と達て被申候。其時被仰候は、成程其方申通に候故、却て此度御越可被成と思召候。我等只今太閤と鉢楯に及候ては、中々此以後五年十年にては、天下の弓矢をさまり申と云事有間敷候。然ば天下の難儀と思召候。其故太閤と御和睦被成候。若大事に及候へば、太閤の殺生にては無之候。天より御殺被成と申物にて候。其上大かた氣遣成儀も有之間敷ぞと被仰、御越被成候。扱また被仰置候は、もし京にて不慮の儀出来、及生害候は、大政所の儀は、手前は構不申候。如何様ともに候。女ども事は早速京へ送届候へ。此事最初より妻が此時榊原様御内所様知事にて無之候。其上手前が下手人に女を取候てなど、申事も、有間敷儀と被仰置候て御越被成候。

一、武林唯七系圖

武林唯七見録 本姓孟氏、祖父二寛朝鮮の役に、爲援兵大明

より朝鮮に來る時、吾が兵の爲に捕へられ壽を以て終ふ。
武林は大明にて郷里の名也。醫を業として次菴と稱す。

孟二寛 稱武林次菴 安藝候ノ歩卒
明曆三年死



一、新井氏、堀田筑前殿を被評事

天野彌五右衛門殿、先年大石内藏助、細川越中守殿へ御預の砌、態々内藏助に逢可申ため、越中守殿へ被參、則逢被申候。其時の挨拶に勇氣と申物は、疎忽と無分別との間より出るものに候處、御自分方の勇は、少も疎忽無分別まじり不申段、感入申由被申候。尤の儀とて新井氏感被申候。私